

信州昆虫資料館報

No.13

2015. 4



目次

- | | |
|-----------------------------|------------------|
| 1. 今年のスケジュール | ……………P1 |
| 2. 2014 年度を振り返って | 事務局（野原） ……P2～5 |
| 3. 蝶の鱗粉転写標本と信州昆虫資料館 | 白川英樹 ……P6～12 |
| 4. 山口県岩国市の
山田継信さんからのお便り | 山田継信 ……P13 |
| 5. 新米2級ピオトープ管理士と
信州昆虫資料館 | 宮崎揚子 ……P14～16 |
| 6. 昆虫資料館の窓辺にて | 館長代理 野原 ……P16～21 |

マダラカマドウマ



2019年10月18日 安達誠文 23才

マダラカマドウマ 安達誠文

夜間観察会の折に図鑑から模写したもの。その迫力がすごい（小川原 記）

今年のスケジュール

★本年から**休館日は火曜日**になります★

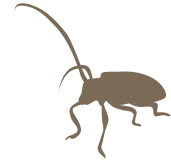
★9.22（火）は開館、**24日休館**とします★

★5月ゴールデンウィークは無休です★

★入館料は高校生以上 300 円です★

★観察会には、お弁当、カメラ、メモ帳、スケッチブックなどご持参ください★

★昼、夜観察会は共に参加費 500 円（入館・保険料込）★



4月

18日(土)/10時

春のオープン

4月18日～6月30日

「十観山と青木村の自然」写真展・窪田洋子・宮崎揚子

女性2人の眼差しは、何を捕えているかな？ ロビーと多目的ホールで。賛助出品もお楽しみに。

5月

17日(日)/10時～

「春の十観山を歩こう。虫や木や花の観察と採集調査」

集合：当館ロビー。下山後、名前調べをします。

6月

初旬～月末頃

「蚕の飼育」昨年引き続き飼育に挑戦。

経験のある世代の方、当時を語り継ぎながら蚕を飼ってみませんか？ボランティア・スタッフを募っています。

7月

19日(日)/15時～

恒例「ハチの講演会」小川原館長の恒例ハチ講座

春先から晩秋まで、ハチに刺されてくる人も多く、長年ハチ刺されの研究をされてきたドクターのお話を聴きます。
(2時半から村のハーモニカグループによる演奏があります)

8月

8日(土)/10時～

「夏の十観山を歩こう。虫や木や花の観察と採集調査」

お弁当持参。そのまま夜間観察も。2階和室で休憩OK。

・17時～特別講座 お楽しみに。

・日没～恒例「夜間昆虫観察会」虫の飛来まで、星空を見上げてしばしの時を過ごします。

9月

連休頃 / 午後3時～

恒例ロビーコンサート 参加費千円（お茶代含む）

丸川尚子さん（歌）とコルナ知子さん（ピアノ）の演奏。

★詳細は近づきましたらホームページ等でお知らせします。

10月

18日(日)/10時～

「秋の十観山を歩こう。虫や木や花の観察と採集調査」

集合：当館ロビー。下山後、名前調べをします。

2014 年度を振り返って



ヒメギフチョウと白川先生

4月 春のオープン・当館10周年記念の「浅間山麓と東信の蝶」をクリエイティブセンターより発行。多くの協力者によ

り後世に残る資料となる。蝶の写真家栗田貞多男さんのギャラリーを山田靖昆虫画展示室の隣の部屋に開設。蝶や鳥などの写真や、オブジェなどを制作する皆さんによる「生きもの好きな仲間たち展」を5月いっぱい迄開催。4月下旬、ヒメギフチョウ羽化の観察と放蝶。4.28北村村長さんが、創造館で講演された白川英樹氏（筑波大学名誉教授・学士院会員）、北澤宏一氏（東京都市大学学長）、丸山暎一氏（理化学研究所名誉研究員）を当館にご案内くださる。館内、

館周辺の森をご案内する。ヒメギフの羽化を観ていただき、一緒に放蝶を楽しむ。北澤先生は飯山市出身で飯山のギフチョウを保全されている田村さん、服部さんも同行された。北澤先生は昨年秋急逝され、本当に残念です。合掌。



後列左より 小川原館長、白川先生ご夫妻、北澤先生奥様、丸山先生、前列 北村村長、野原、北澤学長、皆々さま

5月 連休は山桜満開。ウスバシロチョウが麓から山頂にかけて沢山舞う。麓の宮原さん、宮本さん、桜田さ

ん、沓掛さんらが駐車場や道沿いの藪を整備して下さる。村のハーモニカグループによるロビー演奏会。虫が出てくる曲を皆で楽しく演奏して下さった。青木小学校4年生見学。後に感想文や絵を贈って下さる。

6月 春蚕の飼育を試みる。上田飼蚕姫プロジェクトの金勝先生・着物の和楽座さんにお世話になり小牧の蚕室を見学。普通種と日中交雑種の幼虫を頂く。岡本さん、池田さん、横沢さん、鈴木さんの協力があり蚕は1か月で繭になる。のちに手回しで糸を採る。おひさまクラブの園児たちと先生保護者ご見学。農村留学の品川区荏原中学生徒さんたちが見学。ノートに感想文を戴く。迎え入れた農家の皆さんが車に乗せて連れて来て下さった。



誕生したての蚕蛾

7月 アグロ虫の会ご一行様当館にて例会と自然観察など。麓の旅館でご宿泊。農村留学の品川区東海中学生徒さんたち見学、ノートに感想文を戴く。佐久里山の会、武石の宮原さん自然の会ご一行様ご来館。中



竹材のカマキリと桜材のクモマツマキ蝶

旬から「木で作った虫たち展」加納貴弘さん（逗子市在住）のクモマツマキ・キベリ・アオスジアゲハ・キアゲハ・チャマダラセセリなど各種の蝶を桜の木で彫刻し、原寸大で作る。安東邦英さん（村在住）は竹材を活かし原寸大のカマキリ・クワガタ・カブトムシを。お二人の作品は見事で美しい。27日、館長小川原辰雄ドクターによる恒例「ハチの講演会」。長年ハチの研究をしてきたドクターのお話しは勿論、パネルに描くハチの説明図は一見の価値あり。当日のピアノ演奏は青木村のコロナさん母子による連弾。斉藤太増光氏から著書「タイの蝶Ⅰ」を贈呈頂く。

8月 恒例「夜間昆虫と星の観察会」大きな白布にライトを当てて虫たちに来てもらう。この夜会の常連は増えている。蝶類

保全協会の女性たちの明るさ賑やかさは華
のような。いつもの昆虫協会の田下さん、福
本さんは、蛾類の調査をされており子供た
ちに大人気。蛾類のリストや採集者を松本
昆虫同好会の「まつむし」に掲載してくだ
さっている。これまでに450種近い蛾類を
確認。鳥を撮り続けてきた村の宮崎揚子さ



夜間昆虫と星の観察会

人も、すっかり蛾類の美しさに目ざめ、虫
のアルバムを何冊も作っており専門家たち
を唸らせている。筑波大菅平生物センター
からは、ハダニの佐藤さん、森林害虫の高
木さん、ナガヒラタ虫の小嶋さん、ジュズ
ヒゲムシの真下さん、カワゲラの武藤さん、
粘菌の岩本さんら。一緒に楽しんでくださ
る。リアクションが楽しい常連の子らの成
長は早く、保育園だった子もはや小・中学生、
高校生になる。この夜会、常連さんご家族
方の特製チキンサラダや手作りお菓子は

好評。野原カレーも。長岡君は、ごく普通
の工作ハサミでおり紙を切りはじめ、繊細
な虫たちの姿を浮かび上がらせる。この夜
会で才能が育つ理由は、大人が損得なく夢
中で虫に遊ぶのを見ているため、安心して
好きなことに向かえる故かと思う。

2013年に長野放送で取材に来ており、1年
後の18日に「もう昆虫
を嫌いと言わせない」と
いう1時間番組が放映さ
れた。虫のさまざまな性
質や可能性を研究し製品
開発までされている赤池
学氏、蚊の針をヒントに
血糖値検査の針を作っ
ている会社、モルフォ蝶の
鱗粉光沢の研究から光る
繊維を作り洋服や着物に
しているところ、蚕にク
モの遺伝子を注入するこ
とにより、スパイダーシ
ルクを開発した信州大学

繊維学部教授の紹介と、当館の昼・夜の観
察会が織り交ざった楽しい番組で、録画を
お客様に見て頂いている。虫屋のホープ23
歳の安達誠文君も観察会の仲間に加わった。
また、セミやトンボの研究を深める少女た
ちの家族も、目をキラキラさせている。は
なまる学習の子らが見学。上小理科研究会
の先生方10名様、ニッコールクラブ彩の国
支部6名様。写真家の海野和男氏ご一行様。
23日、繭から糸を採ってみよう体験に、麓
の優しい女性達（早川さん、宮原さん、宮

本さん、大橋さん)が挑戦してくださる。手回しの糸採りは、本当に大変な時間がかかるが、素晴らしい光沢の糸になった。千葉市幕張小学校から農村留学の児童ら見学。

9月 マダラヤンマ保護研究会ご一行様、上田市ことぶきアカデミー29名の皆様、埼玉蝶談話会江村さんらご来館、9.21 恒例口



丸川尚子さん、コルナ知子さん

ビーコンサート、長野市・千曲市・上田市・小諸市・長和町・筑北村・青木村からご参加。おなじみ丸川尚子さんの唄とコルナ知子さんのピアノ。うっとりとした皆さんの表情が和んでいる。群馬県田島茂さん、貴重な田淵行男の蝶の本や写真集、牧野富太郎の図鑑を寄贈される。

10月 青木保育園の可愛い子らが元気にやってくる。山口市からのお客様、山田さんの昆虫画をじっくり観ていかれる。上田市の原田宣和さん、「青木村の蝶標本」を一箱寄贈される。熊谷福祉の会の皆さま。十観山散歩会。長和町・東御市・上田市・長野市・青木村からご参加あり頂上制覇。歩きながら、ユーレイグモ・ザトウグモの類

に沢山会う。エダシヤクが、本物そっくりの枝のようになって45度の角度でピンとして笑いを誘う。途中パラグライダーの飛び立つ広場で休憩。



アキアカネとパラグライダーが青空に舞う姿に見惚れる。人は飛ぶものにもどうしても憧れる。参加者の宮崎金子さん、出会った花や植物などの記録を一枚に納めてくださる。夜間昆虫観察会、長野市・上田市・東御市・小諸市・青木村からご参加。ドイツの昆虫学者さん、一人でご来館。会話が出来ないため、外国からのお客様に歯痒い想いをさせている。26日サプライズコンサート、立川叔男さんの古楽器とご友人の踊り。

11月 埼玉県のグループ様、フィリピンの20歳前後のグループ、記念写真を撮る。11月末、春ご来館された白川先生より寄稿文を戴く。30日で閉館。

12月 初旬、早々大雪が降り、坂道が凍る。残務他、館内整備、冬ごもりの準備をし下山。

2015年2月 チョウ類保全協会総会に出席。中堅を担う方々の清々しい活動に調査の重要性を感じるばかり。齊藤太増光氏に「タイの蝶Ⅱ」を寄贈される。

★上記個人やお友達、ご家族様等でのご来館は載せていません。

蝶の鱗粉転写標本と信州昆虫資料館

白川 英樹

大人になった虫とり少年

5年前の2009年08月19日に、かつて私が勤めていた筑波大学の広報室から一通のメールが舞い込んだ。用件の趣旨は読売新聞東京本社地方部の宮沢記者が、当時インターネット上で発信していた『大人になった虫捕り少年』という連載記事作成のために取材をしたいとのこと、対応の可否を検討のうえ筑波大学広報室あてにご連絡して欲しいというものだった。

宮沢さんは私が中学生時代に鱗粉転写標本を作っていたことや、その後、ソニー教育財団が主催する「科学の泉 - 子ども夢教室」の活動の中で、子どもたちに蝶の鱗粉転写標本の作り方を教えたことなどを、ソニー教育財団のウェブページで知ったらしく、取材をしたいと申し込んできたようだった。

読売新聞のインターネット版 YOMIURI ON LINE に「新おとな総研」というページがある。現在は削除されて見ることはできないが、「初めてのこだわり」に一覧があり、その中に「大人になった虫捕り少年」という連載のウェブページがあった。

このウェブページには、元解剖学者の養老孟司さん、大蔵流狂言方山本東次郎家四世の山本東次郎さん、仏文学者であり「完訳ファーブル昆虫記」全10巻・20冊を翻

訳刊行中の奥本大三郎さん、昆虫写真家で「蝶の道 - Butterflies」など多数の昆虫写真本を刊行されている海野和男さんなど、それぞれの専門分野で素晴らしい業績をもつ方々が紹介されている。虫とりにかけてはいまだに現役で、まさに「大人になっても虫とり少年」の方々である。

この話が持ち込まれた時、たかが蝶の鱗粉転写標本だけで「大人になった虫とり少年」とは大袈裟すぎると思って、余り積極的にインタビューを受ける気にはならなかったが、宮沢さんにお会いしてみると「科学の泉 - 子ども夢教室」のウェブページをよくご覧になっており、鱗粉転写標本のことだけでなく「科学の泉」活動のことも十分に調べて理解されていることが分かった。加えて、彼自身も相当な虫とり少年であり、大人になった現在も活発に活動されている虫屋さんであることで話が弾み3回の連載記事ができあがった。

誠に残念だが現在このページは削除されて読むことはできなくなった。代わりにその大部分が朝日出版社から同名の本にまとめられて出版されたので、その一部を読むことができる。私のインタビュー記事も「虫たちに学んだ科学の心」の題目で納められている。

高校を卒業してからは東京での勉学のた

めにふるさと高山を離れたので、小・中・高校生時代に採集した蝶や蜂、甲虫などの昆虫標本は、手入れ不足で虫に食われたり標本箱そのものが破損したりで、10年も経たないうちにすっかりなくなってしまった。そのようなわけで高山を離れてから昆虫採集はもちろんのこと、昆虫とはすっかり無縁になってしまったが、完全に忘れたわけではなかった。

少年時代にぜひ一度は訪れたいと願いながら果たせなかった名和昆虫研究所（現在は名和昆虫博物館）への訪問は、同じ県内にありながら訪れる機会がなかった。残念なことに現存する日本最古の昆虫専門博物館を標榜するその名和昆虫博物館には未だに訪問できないでいる。また、東京に住むようになって何度もその店の前を通りながら入りそびれていた渋谷の宮益坂上にあった志賀昆虫普及社などもその存在をよく知っていたから、大学生になってからも昆虫には少なからず興味を維持し続けていたことは確かである。

忘れていた鱗粉転写標本の再発見

その一方で、中学生時代に蝶の鱗粉転写標本を作製したことはすっかり忘れていた。再発見は2000年10月10日にノーベル化学賞受賞の報せがあって、多くのメディアから子ども時代の思い出となる材料を提供するように言われて、大急ぎで古いダンボール箱や押し入れにしまっていた小箱などを探し求めた際、妻が見つけ出してくれた鱗粉転写標本である。全部で48点が本に挟ま

れて見つかった。2000年以降、これらの標本の一部はスキャナーでデジタル化して講演のスライドにも使ったので、一般に公開しなかったわけではないが、標本の実物を他人に見せたのはこのインタビューでの宮沢さんが初めてだった。

全部で48枚のうち1枚を除いて手書きのラベルに和名、科名、採集日、採集場所、採集者、備考が鉛筆



図1 アカタテハの標本に付けたラベル

書きで記入されていたので、忘れていた当時の様々なことが明らかになった。

図1のラベルに書かれた採集日を見ると「25・8・10」と記入されている。昭和25年、すなわち1950年8月10日のことで、夏休み中であることが分かる。表計算ソフトのエクセルを使ってこの日の曜日を調べてみると木曜日だった。

最も早い日付は7月30日の日曜日で、この日から9月28日の木曜日までほぼふた



図2 48枚の鱗粉転写標本のうちの40枚

月間という短期間に集中していることも分かった。昭和25年といえば中学2年生の時点で、実に64年前のことである。自分自身が採集した48枚の標本の中で、夏休み中に採集したと思われる32枚は7つの異なる日付、9月の日付の数は7つある。2ヶ月間に14日も虫取りに出かけていたのがわかる。

それにしても夏休みが終わった後の9月の採集日は必ずしも土日だけではなく、月曜日、火曜日、木曜日も含まれているから、放課後の夕方に出かけたのだろうか？(図2)

2009年9月3日に受けたインタビューの後、自宅に帰って改めて標本を整理していたら、思いがけなく一枚の裏側に鉛筆書きで書込があるのに気が付いた。今までは表側しか見ていなくて気付かなかった鉛筆書きが図3である。

当時、昆虫採集に必要な用具、補虫網、ピンセット、シカ昆虫針(志賀昆虫針のことか?)、展翅版など、欲しいものを書き連ねていた。例えば、最初の行の補虫網は直

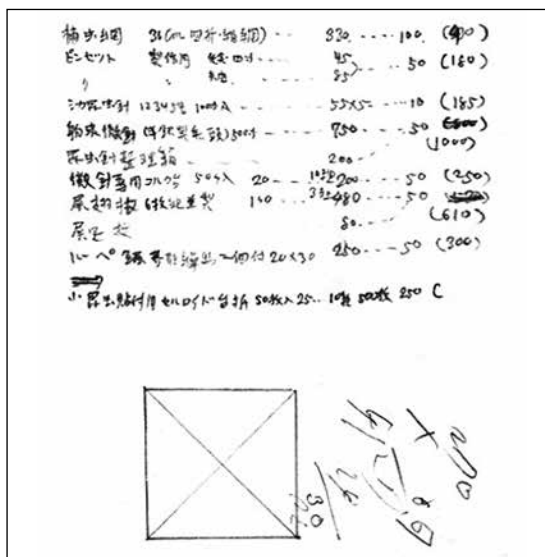


図3 標本の裏の書込み

径36cm、小さく四つ折りに折りたためる絹製の網で、値段は830円、送料は100円、合計が括弧内に書かれており930円と読める。当時としてはかなり高価な補虫網を欲しかったことが分かるが、入手できたかどうかは記憶にない。多分、名和昆虫研究所のカタログを取り寄せて、その中から欲しい道具や器具を選んで記入したものだろう。

昆虫採集をいつ頃から始め、いつ頃まで続いたのかは正確に覚えていないが、小学生高学年から高校1年生まで続いたのではないかと考えている。それにしても、5年も6年続いた期間で、蝶の鱗粉転写による標本作りだけが中2の夏休みを挟んだ2ヶ月という短期間に行われたのは何故だろうか？

それに48枚の鱗粉転写標本には、大好きだったギフチョウやミヤマカラスアゲハなどアゲハチョウの仲間やクジャクチョウやオオムラサキなどのタテハチョウの仲間など、大型の蝶や美しい蝶は一切含まれていないのも不思議である。鱗粉転写をした蝶の殆どがモンシロチョウやキチョウ、モンキチョウなどありふれた種類か、クロヒカゲやオオヒカゲなど地味な種類である。恐らくギフチョウやミヤマカラスアゲハ、クジャクチョウ、オオムラサキなどは展翅標本として大切に保存し、複数採集できた地味な蝶を試しに鱗粉転写したのではないかと考えられる。それにしても鱗粉転写標本の作製が短期間に終わった説明にはならない。

48枚の標本はおおよそ縦20cm、横13.5cmほどの画用紙に貼り付けてあったが、その寸法と紙質や厚みは一枚ごとに異なって

おり、手元にあった厚手の紙ならば何でも利用したものと思える。利用できるものならば何でも使った他の証拠も見つかった。鱗粉転写の用紙には薄手のパラフィン紙を使うのが普通であったが、父からもらった薬包紙や医薬品の包み紙まで利用していたのだ。図4に示したサカハチチョウの標本には、どこかの製薬会社のマークが浮き出ているのがはっきりと分かる。標本を作るために使ったパラフィン紙代わりの用紙は医薬品の包み紙の再利用であった。

昨今、横浜のこのあたりもすっかり住宅に囲まれてしまい、自然を残した空き地が少な



図4 印刷されたマークが透けて見える転写用紙を使ったサカハチチョウの標本

くなったが、庭にはシジュウカラやメジロ、ときにはキツツキの仲間のコガラがやってくる。ナミアゲハやキアゲハ、アオスジアゲハ、クロアゲハなどの大型蝶もやって来る。中学時代にも見たことのない美しい蝶もやってきた。本来ならば南方系の蝶だが温暖化が進んで、関東地方にも勢力を拡げつつあるツマグロヒョウモンであると分かったのはつい最近のことである。スマレの仲間を食草とするので、庭に植えてあるパンジーやビオラを狙っ

ているのかも知れない。渋谷の宮益坂上から戸越銀座に移転した志賀昆虫普及社に出かけたのは3年前のことになる。60年ぶりに蝶の鱗粉転写標本を作ってみようと考えて、少年時代にあこがれながら手に入れそびれていた補虫網を購入して、「科学の泉」で使うようになった。

信州昆虫資料館訪問

さて、前置きがとても長くなってしまったが本題はこれからである。昨年4月27日の午後から上田市の上田創造館で“東京都市大学シンポジウム in 上田”が開催されることになり講演を行った。この講演会はつい最近急逝された東京都市大学学長の北澤宏一学長が企画されたもので、私のもくろみは講演会そのものより、翌日28日に北澤さんのふるさと飯山の黒岩山でギフチョウに会うことであった。北澤さんも快く私の意向をくんでいただき、ご夫妻と一緒に飯山に一泊する予定を立てて下さった。この日の午前中は青木村の各所を見学することになっており、初めて聞く信州昆虫資料館も見学先のリストに加えられていた。この施設についてはあらかじめ何点かの資料を頂いていたのでこの訪問を楽しみにしていた。

この日は午前10時に上田東急インを出発して信州昆虫資料館に直行した。上田駅からは一本道で青木村の市街地や庁舎を過ぎて、つづら折りの坂道を登った所に信州昆虫資料館があった。元は農協の保養施設で温泉風呂や宿泊施設もあったが、農協が手放して町が買い取り昆虫資料館に衣替えを

したそうだ。資料館のまわりには桜が沢山植えられており、満開で見事だった。

施設の運営は青木町ではなく、町で唯一の医師である小川原辰雄先生がされており、小川原先生が集めた標本やおびただしい数の図書・資料を取っていて、小河原先生がこの施設の名前を昆虫資料館と名付けた理由が頷けた。この日は月曜日なので休館日だったが、小川原先生を始め、関係者の皆さんが我々のために資料館を開けて歓待して下さいました。

実質的な管理・運営は館長代理の野原未知さんが行っており、広い施設の隅から隅まできれいに整理・整頓されていた。ヒメギフチョウの飼育も行っており、野原さんが担当しているヒメギフチョウの羽化日は温度管理である程度調節ができるようで、今日に間に合うように羽化日を調節してあったので、十数匹の羽化を観察することができて大いに感激した。

思いがけず目にとまった鱗粉転写標本の冊子

それ以上の感激は書棚の中から麻紐で綴じた鱗粉転写標本の冊子を見つけたことだった。本棚には無数の昆虫本に混じって少年時代に使っていた北隆館の日本昆虫圖鑑などもあり、めぼしい本を取り出して見入っていた時、野原さんがこんなのがありますよといって取り出して下さったのがその冊子だった。

鱗粉転写標本を貼り付けた B5 版ほどの大きさの台紙十数枚が縦長の上辺を麻紐で綴じられて冊子になっており、表紙には鉛

筆で書いた上を黒インキのペンで蝶蝶となぞられており、ご本人と思われる少年が大きな捕虫網を振って蝶やトンボを追いかけている様子が描かれていた。また、赤鉛筆の横書きで下部に「井上智弘」、右側に縦書きで「昭和十四年以降〇〇」と記されていた。〇〇の二字は翌年とも読めるが定かではない。次頁は「蝶の目録」になっており、表紙と同じ鉛筆書きの上を赤鉛筆で同じ字が各加えられていた。蝶の目録とは書きながら、リストにはエダシャクやシホカラトンボの名前も記されており、蝶ではないことを示すために括弧書きでそれぞれ(ガ)や(トンボ)と書き添えられていた。この少年の几帳面な性格が垣間見られて興味深かった。

標本に添えられラベルによると採集場所が「深志公園前」、「筑摩森付近」、「美が原近」などとなっていることから、井上少年は松本市近辺に住んでいたと推察された。私



図5 冊子の表紙

鱗粉転写標本の作製に夢中だったのは昭和25年だったから、昭和14年に井上さんが私の年頃と同じ頃だったと考え、ひとまわり年配の方だったことになる。戦前と戦後の違いはあるが、それほど違う年代ではない頃に、日本アルプスを境とした小都市、高山と松本、に蝶の鱗粉転写標本の作製に夢中になっていた虫とり少年がいたことを思うと感慨無量で、暫くの間、冊子を本棚に返すのを忘れて見入ってしまった。

野原さんの許しを得て、表紙と目論のほか数枚の標本（図6など）を写真に撮らせて頂いたが、鱗粉転写した前翅と後翅を貼り付けただけの私の標本と違って、井上少年は鱗粉転写標本作製の定石通り胴体と触角も書き加えられていた。

ひとまわり上の方ならば90歳を超えた年配の方だがご存命ならばお目にかかって、昆虫採集に夢中になっていた少年時代の頃を語り合いたいと思い、帰宅後に小川原辰雄先生にこの冊子を入手した経緯を伺った。間もなく先生から丁寧な長文のお便りで入手の経緯とご本人のことを明らかにして下さいました。

「前略 先般は昆虫資料館へご来館賜り光榮に存じます その節お眼にとまりました鱗粉転写標本の作者に関するお問い合わせにつきご報告申し上げます」、「今回の資料も松本市の行きつけの古書店から以前無料で頂いてきたものであり、中略、その古書店のすぐ前にあった医院の院長の作品に間違いありません」、「井上智弘さんとは全く逢ったこともない方です。現在息子さんが歯科医院を



図6 キアゲハ

開設して市内の他の場所に移転したとのことにて智弘さんは既に故人となられたとのことであります」。また、「井上智弘氏の御略歴につきましては古い『医籍総覧』所載の記事を同封いたしましたのでご覧になって下さい。井上氏は昭和三年生まれとありますから・・・後略 昭和二十六年五月十六日」などとお知らせ頂いた。

昭和三年生まれなのでご存命ならば86歳なのでお目にかかれることは可能なお年だが、いつお亡くなりになったのか残念な思いだ。

蝶の標本は殆どが展翅標本で、鱗粉転写標本を見る機会は殆どない。いつか国会図書館のウェブページで名和昆虫研究所の名和靖さんが作成した標本の写真を見たことはあったが、私が作製した以外の実物の標本を見たのは今回が初めてだった。井上少年がどうやって鱗粉転写標本の作製方法

を知ったのか、どんな思いで作製したのか、何故この標本が古書店に渡ったのか、誰がどんな思いでこの標本を古書店に渡したのかなど、知りたいことは沢山ある。

終わりに

冒頭に書いたように信州昆虫資料館を知ったのは、講演のために上田市を訪れることが決まってからで、正直に言うと青木村が長野県のどこにあるかさえ知らなかった。慌てて地図を広げて青木村を探したが、信州昆虫資料館が青木村のどこにあるか行き着くことはできなかった。インターネットで「信州昆虫資料館」をキーワードにして検索して初めてわかった。

その存在を知らなかったのは私だけかも知れないが、広く知られているとは言い難い。膨大な標本もさることながら、小川原先生が収集された書籍や図鑑、文献などの蔵書は、必要な人にとっては何物にも代えがたい資料であり、「知る人ぞ知る」だけの存在である

とすれば残念この上ないことである。

私設の資料館とはいえ、そこに保有されているすべての資料は多くの人がある恩恵を受ける可能性のある公的な知的財産であることを考えると、公的な支援、たとえば、施設の広報や蔵書のリスト作りや資料のインターネット上での公開などの支援があつてしかるべきだろう。

地方の時代、地方の重要性が叫ばれるようになって久しい。しかし、大都市への集中がより一層強まりこそすれ、地方の地盤は沈下が進む一方である。観光も大切だが、文化施設の維持・発展も大切なことで、我が国が世界に誇れる国になるとすれば、経済大国であるよりも、国民の一人ひとりが文化を育み大切にする国であることだと思っている。市町村だけでなく県や国のより一層の配慮が求められるが、先ずは関係者がその存在と意義に大きな声を挙げることだろう。私も声を大きくして応援する次第である。 完 (2014/11/25)

★ノーベル化学賞を受賞された白川英樹先生から上記の御寄稿を戴きました。

白川先生は、1936年東京で生まれました。小3からお母様のご実家、岐阜県の高山で成長されました。野に山に川にと遊び、家の手伝いもする少年は、暮しの中でたくさんの不思議を考えておられたようです。1961年に東京工業大学を御卒業、同資源科学研究所の助手を経て、ペンシルバニア大学博士研究員としてアメリカに渡りました。1982年に筑波大学教授となられ2000年に御退官。この年に、ノーベル化学賞を受賞され文化勲章も受賞されておられます。著書に「科学に魅せられて」岩波新書(2001)などがあります。導電性ポリマー(プラスチックが伝導する)の研究や発見の過程、学問や自然への好奇心や飽くなき探求の、感性豊かなお姿に触れることができます。宇宙開発はじめすべての分野に及び、身近な携帯やスマホにも使われています。

山口県岩国市の山田継信さんからの便り

信州昆虫資料館及び青木村の皆さま、こんにちは。

故山田靖長男「継信」と申します。

小川原先生や野原さんには、カビも生え瀕死状態だった父の絵を救出していただき、深謝の限りです。こうして皆様方に厚遇していただいているお蔭で、父の絵も陽だまりの中でいきいきと生き延びているのではないかと思います。以前から、一度は信州へ訪ねたいと思いつつ、なかなかタイミングが掴めず今日に至っております。当時の科学センター所長の石本さんや教育委員会の方々、そして親類の西教寺夫妻が青木村に行ってきた話を聞けばかりでしたが、どんなところだろうと想いが募り、楽しみにしています。

皆様方の、更なるご活躍とご健康を、心よりお祈り申し上げます。

2015. 2. 5

山口県岩国市周東町瀬越 633 山田継信

★昨年冬、昆虫画の山田靖さんの地元瀬越・桧余地の皆さんが交流会を開いてくださり、久しぶりにお訪ねしてまいりました。館内外や山田昆虫画展示室の様子などのDVDを持参し、皆さんに観て頂くことができました。なだらかな丘のような山が重なるその地は、信州の山里のやさしさに似てほっとする空間で、昔の日本の風景そのままのようでもあります。交流会には、岩国の石本直邦さん、錦川（錦帯橋が掛かっている川）を守る会を長年率いて来られた岸村進さん、和木町文



写真は昆虫画を観る白川先生ご夫妻

化協会長で画家の島崎こずえさんと私が招かれ、心のこもった手料理を頂きながらしばしの時を過ごさせていただきました。

(野原)

新米2級ビオトープ管理士と信州昆虫資料館

宮崎揚子（青木村在住）

「ビオトープって知っていますか?」「ビオトープ? あ～知ってる! 池の事でしょ」良くこういうお返事が返ってきます。実はビオトープに「水（池）が必ず必要である」という定義はありません。ビオトープとは「(地域の野生の) 生き物達が生息する空間」の事なのです。もちろん水があることでより多様な生き物の生息空間を望めますが、水があっても無くても生き物がそこに居ればビオトープになります。ビオトープ作りとはこの生息空間を整え、従来そこに居る動植物を保護し、安定的に自然発生させることを目的としています。

さて、信州昆虫資料館（以下昆虫館）で何故ビオトープを作ることになったのか。私は青木村在住ですが、生き物の写真を撮る為に十観山に良く足を運んだものの昆虫館との接点はあまりありませんでした。そんな私が館長代理の野原さんと出会い、親しくなる機会を得たのは平成25年。オオムラサキが繋いでくれたご縁でした。

昆虫館の周囲には実に様々な生き物が生息しており、何度行っても飽きる事はありません。そんな恵まれた自然環境や生き物の話をしていくうちにビオトープを作ろうと意気投合。幾つかビオトープ候補地が上がり、最終的に昆虫館の周辺の森を活用し

てはどうかと提案したところ、快いお返事を頂きビオトープ作りが始まりました。野原さん協力の元、実質的な活動は昨年からはじめたわけですが、これが思った以上に大変でした。

整備し始めた場所にはパイオニアであるタケニグサがはびこり、藤蔓が地面を覆い、蔓が木に巻き付いています。まずはそれらを取り除く事だけでシーズンが終わりました。ビオトープの整備ははっきり言って地味で手間もかかります。生き物に気を使いすぎると何も出来なくなりますし、かといって生息地を奪っては本末転倒です。希少種の保護は当然ですが、特定種ばかり肩入れすることも生き物の多様性を狭める要因となります。草地で生きる多くの昆虫は身の危険を感じると地面に落ちて逃げます。そういった生き物に出来るだけ逃げる時間を与える為一気に作業することもあります。刈り払い機等の機械を使ったとしても地面から10~15cm以上の高刈りを行いますし農薬や除草剤を使う事なんでもってのほかです。現代の合理作業から考えれば面倒くさい事この上ないかもしれませんが、食物連鎖の底辺を大切にしなければ生物の多様性は望めません。

同じ木が整然と並び、一面に植えられた

芝生は地面から数センチ単位で刈りこまれ、花壇には同じ花が咲き、秋には落ち葉一つない整った庭。虫が出たと言っては消毒薬を散布し、静かな緑の空間。私はこれを人間の庭と呼んでいるのですが、この対極にある庭がビオトープ（生き物の庭）と思って頂ければ良いのかもしれません。無秩序の秩序。植物と生き物のバランスを見て感じる事がビオトープではなによりも大切な作業となるのだと思います。

また、手入れと同時進行でビオトープを作る場所がどのような土地でどのような植物や生き物が居るのか、データベース作りも始めました。

鳥・昆虫に関しては自分が観察してきたものを資料としました。蛾類は昆虫館で行われている夜間観察会の協力者が毎年データを作成されているのでそれをお借りしました。植物に関しては「上田自然に親しむ会」の方が調査を行い草本・木本等のデータを作っていました。そのデータをお借りし、土地と植物の関係に詳しい方（県外在住）から土壤の検証も頂きました。

「元の原生林か植林地を伐採した後、二十数年以上放置された二次林、もしくは薪炭林としての利用が放棄されてから十数年経た雑木林、といったところでしょうか。岩が多く痩せ地だということですが、なるほどリストを見ると納得です。しかし、そういう土地に対応した植生がしっかりできており、ある程度安定している様です。菌根性樹木が多いのは、そういう痩せ地への適応です。フサザクラが生えるのは、少なく

とも崩壊してからせいぜい数十年以内の元崩壊地であり、今後も崩壊する可能性の高い場所です。注目すべきは、イチヤクソウ科の植物で、そのあたりに分布している可能性のあるものがほぼ出揃っている点です。イチヤクソウ科はラン科と同様の菌根植物で、ラン科以上に菌類に頼る部分が大きく、従ってラン科以上に気難しい植物です。単純な移植はほぼ不可能。種子を蒔いてもそうそう定着してくれるものではありません。樹木だけならともかく、草本植物のレベルでこの種のものが豊富にあるのは、地下で菌根系がかなり十分に発達している、岩だらけの痩せ地に適応した土壤がしっかりできあがっているようです。少なくとも「その土地の条件に適した植物の良好な生息環境」は今のところ十分に保たれているように思います。一番問題なのはハリエンジュで、根粒菌があるから痩せ地でもどんどん成長するし、成長も早いので、他の樹木を圧倒してしまいます。これだけは早めに伐採した方がよいかもしれません（中略）」という結果でした。



この作業はまだ始まったばかりです。それでも植物・樹木・土壌・菌類・鳥・昆虫・哺乳動物、それぞれに興味のある仲間が集まり各々の情報がこれからも蓄積されていけば、昆虫館だけでなく、青木村の自然史にとって貴重な資料となるのではと感じています。

山は生きているので永遠に同じ状況に置くことは土台無理な話ですが、上記にある様に土壌の傾向も分かりました。そしてこの地は長い間人の出入りがある場所でもあり、人が持ち込んだ雑多な植物が入り混じった興味深い地でもあります。この地を

未来に繋がるビオトープとして活用出来ればと夢は膨らみます。今後人為的に手を入れ、整備してく事で動植物がどう変化していくのかはわかりません。失敗もあるでしょう。コンスタントに整備の時間がとれるかも未定です。それでもビオトープ作りの仲間が増え、植物が健やかに育ち、生き物が増え、鳥の声がうるさいくらいに聞こえ、昆虫が空を舞い、夜には涼やかな虫の音が聞こえる。そんな空間に身を置いてカメラを構え、にやりと笑っている10年後の自分を想像するとなんとも幸せな気分になれるのです。

昆虫資料館の窓辺にて

館長代理 野原未知

立ち上げの2003年から本年2016年春を迎えるまでの道のりは、七転び八起きしては虫の息を繋ぐような不器用さで歩いてまいりました。昼なお暗い森を抜けての通勤が続きましたが、ここ数年間伐の手が入り、木々の根元にまで光が届く山になりました。草木の喜びが伝わってくるようで、気持ちも明るくなります。

館代表の小川原ドクターの村での診療は

半世紀を過ぎました。その間に執筆した著書は「糖尿病管見」「白夜の旅人」「村医110話」「信州一農村を診断する」「博物誌—内科医の生物体験」「ハチ刺し症」「身近な危険ハチ刺し症」「地域医療序説」「青木村医療史」「虫とたわむれ自然と暮らす」(共著)、そして昨年発刊した「浅間山麓と東信の蝶」(共著)と多数になります。いずれも独自の視点があり時代背景も見えてく

るような本ですので、閲覧をお薦めします。

今年は当館周辺や青木村の生きものたちを撮影している村に所縁のある女性二人の作品展から始まります。その一人宮崎揚子さんは、山のビオトープの夢にコツコツと向かい、窪田洋子さんはそっとやって来て黙々山に入っていきます。お宝のカメラを抱え素敵に笑うお二人、とても楽しみです。館内では、増えるばかりで積み上げていた標本類の整理という大仕事が捗らず、長年気にしていたのですが、近年からのお手伝いに入っている大川さん（村在住）が担ってくれました。埃や汚れを取り、見にくいラベルを再興し、外国産のものは原産地の地図まで添えて種別ごとに美しい標本箱にしていきます。ラベル（いつ、誰がどこで採ったかの記録）がない標本を活かす標本箱もできました。企画ごとの記録写真、蝶のタマゴや幼虫、蛹、羽化したばかりの美しい姿を写真に納め、大川さんも虫屋のようになってきました。

時代は流れ、昆虫少年たちが網を振り回して野山を駆ける姿は皆無に等しく、かつての夢や憧れを保持している虫屋さんたちは環境保全に努められ、若者や子供たちに自然や生物の驚異を体験させるべくの日々を過ごされています。近くでは戸隠昆虫自然園を開設された山口文男さん、蝶の民俗館の今井彰さん、環境保全協会の茅野實さん、黒姫でギフチョウの自然羽化を護る田中芳徳さん他で、皆さん長年の昆虫協会長野支部の先輩方。山口さんは、昨年10月

ご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

長野市の氷室淑さんは、地道に仲間たちと昆虫誌「カラコルム」を継続されており、昨年は東京の「アグロ虫の会」の皆さんも当館で例会を計画され、到着するなり十観山に入って行かれました。青木村自然を守る会の皆さんもまた、繁茂する外来植物を伐採したり、ホタルやオオムラサキの保全、子供たちへの啓蒙など活躍しておられます。各地昆虫館、グループ等によるご来館があり皆さんから会誌や昆虫誌を戴いております。また、埼玉県のアトキョウ愛好家の関口さんらは当初から当館を大切にしてください、各地域に棲息する蝶たちの生態写真を楽しみに撮り、保護活動に取りくまれています。足元の一步にも気を配り、必要以上に生息地を漏らさない姿勢に共鳴し、常設展コーナーを設けています。網を振る人振らぬ人、今もなお虫と共に在り、その熱心さには目を見張るばかりです。

昨年春「大人になった虫とり少年」（宮澤輝夫著・朝日出版社 2012年刊行）の一人、化学者の白川英樹先生と、北澤宏一先生・丸山瑛一先生ご一行様を、北村村長さんをご案内下さいました。ちょうどヒメギフチョウ羽化の頃であり、ご来館を聴いたので館内の寒い部屋で蛹を保管し、来館日時に合わせてみました。それは初めての試みでしたが、バッチリ成功。開館3年目の春先、名和昆虫博物館を表敬訪問したくその地を尋ねたことがあります。館内に

設置された大型のガラスケースに、ギフチョウの羽化が見られるように展示しており、蛹から出てくる蝶、出たばかりの蝶の様子を食い入るように見ていた私が居ました。羽化の様子や、立てた枝を伝って登り、翅を乾かし拡げて飛び立つ様子など、ケースの中の一部始終を記憶に任せて真似た次第。(隣の記念館の印象など、館報No.1に掲載) 蛹を掌に載せて「先生、これがね、」と指をさした瞬間、目の前で瞬時に羽化。

白川先生の瞳は大きく見開かれ、すっかり昆虫少年そのもの。その時に放蝶したチョウたちは桜並木に舞い上がり、1週間ほどのちに戻って来てたくさん小さな卵を産みました。卵は幼虫となり葉を食べ尽くし、食草ウスバサイシンの茎の先端にしがみついてひもじさを訴えるので、山を這いつくばって探すもそうはなく、アオイ系のものを採ってきて植えてはみたものの口に合わぬと。ようやくウスバサイシンを植えたのですが、時遅しだったのかさほど食べぬうちに大半がいなくなり。どこかで無事に蛹になって、自然羽化してくれるよう祈るばかり。わずか保護した蛹は今も寒い館内で越冬中。はたして4月中旬以降にいつものように羽化してくれるかどうか。厳寒の森でじっと春を待つ蛹たちを思いながら山の麓で過ごす冬。

さて図書コーナーでは鱗粉転写の時代を過ごされた白川先生が、昔の松本の中学生が作った手製の鱗粉転写の小さな冊子を手をされ、とても喜ばれました。のちに館報のために寄稿文を送って下さり、白川先生

の暖かい眼差しを戴き感謝に堪えません。また、北澤宏一先生が昨秋急逝され、俄かに信じがたく、ご冥福をお祈り申し上げます。

「大人になった虫とり少年」は、白川先生のほかアーサービナード・養老孟司・山本東次郎・奥本大三郎・海野和男・岡田朝雄・中村哲・藤岡知夫・福岡伸一・北杜夫・茂木健一郎・手塚浩・木下総一郎・宮澤輝夫氏の昆虫少年物語。

養老氏は一昨秋、鎌倉蝶話会の皆さまとご来館。かつての磐瀬太郎氏に私淑していた中学生たちの一人でもありました。何冊かご本を購読していますが、お帰りになったのち「自分の壁」が本屋に並んだので早速購入。とくに折り合いをつけるというくだりでは、いたく学んだ気がします。

小川原館長が横浜にいた頃の後輩、早野育夫氏が鎌倉蝶話会の幹事で、例会宿泊を当館・当村に選んで下さいました。当日は葛谷健氏と布施英明氏の発表があり、興味深い蝶の調査内容や鎌倉蝶話会の成り立ちについて知ることが出来ました。この会の面白さは、会費会則なし。必要に応じて臨機応変というところ。達人が集まる時はこのようなものになる、と納得です。鎌倉蝶話会は、本年秋にも当館に来られます。

海野和男氏は昨年青木村出身の写真仲間とご来館。小諸高原美術館での個展に夕方ギリギリで観に行きました。大きなカブトムシの写真がどうしても現代美術の絵に見えて愉しく拝見。小諸には「読書の森」と

いう楽しいカフェをやっている依田夫妻がおられ、数年前、小川原館長のハチの講座を設けて下さいました。小諸在住の海野氏が、読書の森で蝶の仲間を増やしているのは言うまでもなく、依田さんそのものが自然児。

岡田朝雄氏とは北杜夫氏の最後の講演会となった軽井沢高原文庫にて、初めてお目にかかりました。新部公亮氏のアプローチで「ヘルマンヘッセ昆虫展」を開催した際には、改めて岡田氏訳の「少年の日の想い出」を読んだものです。「シッタータ」「蝶」「色彩の魔術師」他、ヘッセの作品を多数翻訳されているドイツ文学者。

北杜夫氏とは、やはり新部さんの企画で当館にて「どくとるマンボウ昆虫展」を開催したきっかけで、晩年何回かはお目にかかりました。

数年のご様子の中では、長坂のオオムラサキセンターでの講演時に比べて、高原文庫でのお姿の方がはるかにしっかりされていたと思います。会場には松本の平沢伴明氏のお姿。彼こそマンボウビロードコガネの発見・命名者であり、北氏に捧げるセレモニーを見せていただきました。読み進めると北杜夫氏と橋本碩氏の再会のことが書いてあり、ああ、こんなふうに出会えたのだなと安堵しました。というのも、新部さんから何度か電話を貰っており、教育大理学部に在籍していた橋本碩先生の消息を安藤裕先生（筑波大学名誉教授・故人）ならご存知では？とのことで、先生にお尋ねしたことがありました。その時は分からないと

のお返事でそのまま新部さんに伝えたのですが、その後随分時間が経って再々度の電話が鳴りました。何とか探し出して、ご存命ならどうしても北氏と会わせたいという真摯な想いが伝わって来て、伊豆の研究所でユスリカの研究をされていたお話しに、ふと思いつきました。筑波大学菅平生物センターで、年一回のゼミが開かれており、研究者も学生も15分の持ち時間で終日研究発表が行われます。安藤先生ご存命の頃、薦められて2、3回参加したのですが、ある年に伊豆の海辺の研究所にいと仰った先生がユスリカの発表をしていたことを思い出し。随分時間が掛かってしまいましたが、セミナーに集うお一人、首都大学東京の教授をされていた小林幸正先生に、橋本碩氏の情報についてその理由と共にお願いしました。何年もお無沙汰の上での恐縮至極のお願いに、小林先生は快く探して下さい、そしてお返事を戴きました。早速新部さんに伝えましたが、かくて無事再会された様子が載っており、新部さんと宮澤氏のお力、そして小林幸正先生のお蔭を思い、こういうことであるのだなあときっと暖かい展開に和む思いでした。

奥本大三郎氏は仏文学者。面識なく開館準備中に背表紙で名前を知りました。はじめて手にしたのが「虫の宇宙誌」でしたが、これは昔読んだ「夢の宇宙誌」の澁澤龍彦をすぐ連想。奥本氏のファーブル昆虫記完訳版が集英社から出ています。「虫の詩人の館」館長であり、岡田氏との共著「楽しい昆虫採集」も出版されています。（ちな

みに虫の博物誌という本もある。アグロ虫の会の創立者、小西正泰著) さて、仏文学という文字には、若い頃傾倒していた作家たちもいて特別な想いが蘇ります。同時に、ふと大杉栄(明治18~大正12)が浮かびます。アナーキストの面だけが知られていますが、当館開館当初、昭和初期に出版された「ファール昆虫記」を手にして、一卷の訳者は大杉栄だったことを初めて知りました。その文体からは、自然科学、生物学としてだけではない感性豊かな洞察と深みを感じられ、時代の匂いがあり、来館のお客様方に随分そのお話しをしてきました。

出たり入ったりしていた獄中は、大杉にとっては書齋のようでもありました。全巻訳を果たす心算でしたが、二巻から十巻は椎名其二氏の訳で終わっています。大杉は、第一巻を書き終え二巻に向かっていて時、大正12年9月の関東大震災のどさくさに紛れて伊藤野枝と6歳の甥と共に虐殺されました。そういえば30年も昔に「O氏の肖像」を初めて観たのは長野市の画廊。林俊衛の画でした。O氏とは大杉のこと。大正8年に描かれ、「出獄の日のO氏」が本タイトルだったか。林は上田市天神町出身。明治から昭和の人です。同時代に青木村出身のジャーナリストであり俳人だった栗林一石路がいました。当館報No.2に寄稿戴いた青木村郷土美術館長桜田義文さんの「ファールと一石路」によると、大正13年に栗林は神田の古本屋でファールの「自然科学の話・大杉栄訳」を購入。また「昆虫記」

を入手しているとのこと。はたして栗林は大杉をどう見ていたか、林を知っていたかに興味が湧くばかりです。

アーサービナード氏(中原中也賞・日本絵本賞他多数)は、1960年代に生まれたミシシッピーの昆虫少年でした。2月に信濃デッサン館で開催され塊多忌での鼎談を聴講。ゴリラ研究でおなじみの山極寿一氏、館長窪島誠一郎氏とアーサー氏の発信する「生命」へのまなざしや重さを充分感じて参りました。存在感のある詩人アーサーの活動に注目したいものです。

さて、本の仕掛け人宮澤輝夫氏は1970年代東京で生まれですが宮澤氏もまた虫追い人。活字でもおなじみの皆さんの昆虫少年ぶりは面白く、お薦め本です。面白いかつての少年少女たちは実は多勢いて、その精神は世界中を駆け巡っています。

真っ暗になるまで外で遊ぶしか居る場もなかったとも言える時代、子供は五感も六感も働かせて遊び呆けていました。季節ごとに蝶は舞い、暮れゆく蒼い空が次第に茜色になり、紫になり、金色の雲が黒くなっていくのを恐ろしげに見ながら、私の内にも物語は沢山生まれました。その日々が、のちのちにどれ程自分の情けなさや苦境を慰め、勇気を湧かせてくれたことかを思います。そんな幼少期を過ごした世代は幸いかも知れません。

今年の夏はソニー教育財団「科学の泉子ども夢教室」の活動で、都会の子供たちと白川先生方が当村に滞在し学ばれます。

楽しみにお待ちしたいと思います。

終わりに、白川先生のご寄稿、また本号の印刷に青木村のご支援を戴きましたことに感謝申し上げます。

そろそろ越冬していたテントウムシやチョウたちが舞いはじめます。

本年もよろしく願い申し上げます。

(3月15日)



「信州 浅間山麓と東信の蝶」 Distribution of Butterflies in Mt. Asama & East Nagano Pref.
鳩山 邦夫・小川原 辰雄 著
東信の蝶刊行委員会 / 福本匡志・田下昌志・栗田貞多男 / 編著
クリエイティブセンター ¥2,500 (税抜き)
(当館でお求めいただけます)